

短歌の部

選評

合歓の会

田中 滋子

市長賞

平山

坂本 裕子

我は母 離れ住む息子を想わなで

冷凍で送るおふくろの味

(評) 我は母という自己主張がすばらしい。なかなか言える文言ではないし、下の句七、七がその母の行動です。想わなでという語句にも息子への愛情があふれてそれをかくさない、いいなあと思いました。

議長賞

荒尾

中山 和

丸文字が書を嗜みて行書体君の進化は輝き放つ

(評) むだのない詠みがすばらしい。

すてきな行書体に進化を拝見したいものです。

書を嗜む君を詠む作者の姿勢がやさしい。

教育長賞

本井手

石橋 和枝

やわらかな春光浴びるかたくりの

うつむく花をうつむいて見る

(評) うつむくという語句を重ねて詠む作者の姿勢がよりかたくりの花を浮かびあがらせている美しい景です。あの小さな花に逢いたくなりました。

熊本日新聞社賞 大牟田市勝立 梶原 公子

「大丈夫?」「気をつけてね」と娘の電話

今日は身に染むいつもの言葉

(評) 会話を交わす娘(こ)との電話、それが今日は身に沁む。それだけの歌ですが「いつもの言葉」の結句がことば以上の作者の思いが秘められている気持で詠みました。

文化協会会長賞

大平町

下津 晃

熊蟬の一つが鳴けば二つ鳴きわが家の庭は朝となりけり

(評) 日の出の庭にそっと立っている作者の心意気がいいですね。一つが鳴けば二つ鳴くとかさねていることも朝となる、庭の景を写しとっているようで美しい景になりました。

秀作

1

牛水

西島ミサ子

吹きすさぶ風に紅葉(もみぢ)のゆさぶられ

散りたくないと思死にもがく

(評) 「ゆさぶられ」が下の句のつよい文言につながり美しく効果的です。景以上に作者の心情がこめられているようにも感じてしまうのは私だけでしょうか。

秀作 2 平井小五年 飯島 千夏(ちなつ)

七夕でおり姫さまは会えたかな今夜の星はいつもと違う

(評)夏の夜の天の川を見上げながらこの歌はできたので

しょうか。織姫さまを気付かっている千夏さんの
やさしさにまぶたがうるみました。

「いつもと違う」という結句に千夏さんの心情があふ
れて物語はつづきます。

秀作 2 一部 山口かつえ

青空に秋を知らせるうろこ雲 大漁のしらせという鰯雲

(評)名をもつ二つの雲の物語のような詠みですがいずれも

海に作者の思いが走っています。

特に鰯雲は作者の心の投影でしょうか。

佳作 1 平井小四年 石橋理香子(りかこ)

吹く風に竹は大きくゆれだして空のそうじをしているみたい

佳作 2 平井小五年 尾本 結奏(ゆかな)

柿の葉は風に吹かれておどりだす葉っぱどうしでおしゃべりしてる

佳作 3 下井手 古賀ハルミ

花散りし後の桜の幹黒く宴(うたげ)の後の寂しさの(ごと)

佳作 4 桜山町 田中暢子(のぶこ)

ちどり鳴く母なる海は遠き日の来し方沈め夕映えにけり

佳作 5 一部 松井 和子

バイク音朝のしじまをかけ抜けて

小さくなるを寝床にて聞く

短歌の部

選考会 田中 滋子

麦田 徳子

応募作品 小学生 九首

一般 二十四首

(計 三十三首)

選評を終えて 田中 滋子

三十三首の選考をし入選の選評を書き終えました。

私の選考で良いのか迷い立ち尽すこともありましたが、

与えられた責任をまっとうするだけで評価はみなさん

がつけて下さるものと思っています。今年は自己主張

のつよい作品が揃ったように思います。

小さな文芸展ですが、それなりに価値はあるもの

思っています。

選者詠

横ざまに蜻蛉(あきつ)流れて敗戦を

知りし九才あの台湾の日



肥後狂句の部

選評

吉本 五男

笠 「折角なら」「チャンス」



市長賞

野原

谷口英絵也

折角なら 殿堂入りの二刀流

(評) 日本では勿論、全米注目の、大谷翔平の二刀流、早くも殿堂入りの噂しきり、ただ体には充分気をつけて。

議長賞

菰屋

岡村 幸子

チャンス ライバルはもう弱つとる

(評) 前のランナーがもう視線に入ってきた。ゴールはもうまじかだ、頑張れ頑張れ。

教育長賞

樺

上村マチ子

折角なら もらった遺産役立てて

(評) 遺産分けといえば、親族の醜い争いのイメージを想像しがち。

願わくばその遺産、役立てて貰いたいものです。

熊日日新聞社賞

増永

松田 司

折角なら 爺の意見も聞かんかい

(評) 今の若い人は、大人の意見に耳を傾けず、自分よがりの行動をおこしがち、たまには年寄りの意見を聞く耳を養ってもらいたいものです。

文化協会会長賞

宮内出目

前川 幸子

折角なら まちよつと惚れる素振りせえ

(評) 私を好きならと好きと、はっきり言わんネ。昨今は、女の子がしっかりしてますネ。

秀作 1

増永

前川久美子

チャンス ここで打たんと名が廢る

秀作 2

牛水

中川 冴子

チャンス 帰つてもろて助かった

秀作 3

蔵満

菊川千恵子

チャンス 乗ってみようか玉の輿



佳作 1 宮内 西川としお

折角なら 素面で言つてプロポーズ

佳作 2 増永 横尾 節子

チャンス 鬼の居ぬ間にグルメ旅

佳作 3 本井手 黒木 秀哉

チャンス 生かし長年ボランテイヤ

佳作 4 平山 山川 静子

折角なら 金のなる木を植えてみよ

佳作 5 下井手 檜原亜由美

チャンス 明るい未来つかみとれ

選者吟

折角なら 土産は 地元産にして



川柳の部

選評

松村華菜

課題 「味」



市長賞

増永

太田 清美

味のある役者の顔にある矜持

(評) 何事にも、その事ひとすじに精進された人には
他人には真似の出来ない味がある。下五の「矜持」
と詠んだ所が秀逸である。

議長賞

牛水

岸本 瞳

失策へ差しのべられる人情味

(評) 人間は万能の神ではない。幼稚さも傲慢さも
そして失敗をするのも人の姿である。失策へも温かい
手をさしのべるのも崇高な人の姿なのだ。

教育長賞

緑ヶ丘

松尾 末子

ハートより胃袋掴み半世紀

(評) この句の通り人の一生なんて食べる事がいちばん。
毎食おいしいものを作ってくれる妻が一番である。

熊本日日新聞社賞

荒尾

田中 悦好

離乳食味が嫌いかプツと出す

(評) この場面の絵が見えて思わず笑い出す。
初めての味で赤ちゃんの反応が楽しい。

文化協会会長賞

本井手

吉本 五男

値引き札値引きの訳のわかる味

(評) 川柳的でユーモアに溢れた句です。
品物が賞味期限すれすれだったか、見た目は甘
そうに見えたミカンが、酔っぱかったりする。
「値引きの訳のわかる」に作者のがっかりした
顔が浮かぶ。

秀作1

桜山町

後藤 紀子

味のある人になってと子を育て

秀作2

荒尾

中山 和

大人になって知るすっぱい人生

秀作3

増永

松田 司

この味を守って老舗子に託す



佳作 1

増永

横尾 節子

滲み出る辛苦に耐えた人間味

佳作 2

荒尾

中村 千鶴

美味しくなあれ愛をひとふりちらし寿し

佳作 3

長洲町

濱北 葵

舌鼓夫自慢の手打蕎麦

佳作 4

柳川市

森山 秀一

人気店味の改善休みなし

佳作 5

菰屋

岡村 幸子

母の味今だにうまく作れない

選者吟

そして今夫婦の味を噛みしめる



俳句の部

選評

荒尾かのこ

市長賞

府本

荒尾 孜

玉の汗かいて小さく生きにけり

(評) ありのままを分かり易いことばで詠んであり、スポーツか、家庭菜園か、大きな汗と小さな生き様の対比がおもしろい句。

議長賞

下井手

林 紀子

露霜の野がある父の懐に

(評) 一語一語に重みのある句で、露霜といえはシベリアの抑留の苦しみが思い浮かび、お父様の胸から消える事はなかったのだと、想像がふくらむ。

教育長賞

菰屋

園田 夕子

天の川渡れば父母に逢へさうな

(評) 幾つになっても一番会いたいののは父母。彦星と織姫のようにかささぎの橋を渡って父母に会いたい！同感の句。



熊本日日新聞社賞

一部

西村 安子

二人居のそれぞれの刻秋灯下

(評) 秋の夜長をそれぞれの趣味に没頭し、次はお酒？お茶？と至福の時が流れる。理想的なお二人に乾杯！

文化協会会長賞

川登

坂口三千代

朝顔の空へ空へと海の色

(評) 海の色朝顔が咲き出して、空へ空へと咲き昇る。ついには宇宙と溶け合うのでは？と想像の広がる句。



秀作 1

樺

品沢 譲

盆栽の鉢の中にも秋の声

秀作 2

原万田

野口 汐子

鶏頭のそばより始む庭手入れ

秀作 3

野原

古閑 さち

子が眠りそのあと虫の夜となる

佳作 1
菰屋
夕暮や命燃やせし酔芙蓉

百田 才次

佳作 2
本井手
夫のいるような法事に夏の風

石橋 和枝

佳作 3
八幡台
朝もやの蒼ほのかに古代蓮

菜切川まや

佳作 4
東屋形
一鍬の楔はずるる芒種かな

二村 和子

佳作 5
菰屋
人好きのとんぼの群れと夕散歩

園田 則幸

選者吟



白露てふ日本に美しき言葉

堺 博之

秋夕焼は黄泉のみちとや轍あと

徳山 直子

身を折りて母露草へ語りかく

荒尾かのこ

少年少女俳句の部

選評

徳山 直子

ゴールド賞 1

海陽中一年

清野 紗代

負けるなど背中を押した夏の風

(評) 今年猛暑の毎日、残暑も厳しかった。夏を暑いと言わず、「負けるなど」と感じとり、中七の表現も、季語の「夏の風」もこの句にピッタリ。リズム感もあり、良くできた句。

ゴールド賞 2

中央小五年

奥村 悠大

育ててるひまわり空を見てえがお

(評) ひまわりを育て、いつも観察しているからこの句が出来ましたね。「空を見てえがお」、素直な表現、青空とひまわりから元気をもらえます。私にもえがおの作者とひまわりが見えてきます。

ゴールド賞 3

平井小四年

石橋理香子

天草のなみの音聞くつばきの実

(評) 天草は、たくさんの島がある。よく写生をし島の海辺の景色を「天草のなみの音聞く」と、とらえる詩情にびっくり。いつか波音を聞きに行ってみたい。「つばきの実」の季語の使い方もいいですね。



ゴールド賞 4

荒尾第四中一年

荒尾 快晴

釣竿にぶつかって行くおにやんま

(評) 釣りは忍耐、釣れるのをじっと待っていると、「ぶつかって行く」のは「おにやんま」水底と宙の対比を感じます。とんぼは後戻りしない習性があるのを、説明せず句を詠んでいるいい句です。

ゴールド賞 5

府本小五年

高田竜乃介

積乱雲もくもくとたちあがる

(評) 「積乱雲」この季語をつかって、中七と下五の言葉に、天へ届けとばかり勢いのある雲のふくらみも感じます。黒雲になったら夕立と雷かも。

シルバー賞 1

緑ヶ丘小二年

たけだのあ

およいだりもぐったりしてプール

シルバー賞 2

中央小三年

濱口 柚姫

キャンプして川のほとりのスイカわり

シルバー賞 3

平井小五年

尾本 結奏

運動場チャイムの音とせみの声

シルバー賞 4

長洲小五年

前田じゆり

夏の海きれいな波の音がなる

シルバー賞 5 府本小六年 高田 なつ
太陽に向かう七色しゃぼん玉

シルバー賞 6 長洲中二年 前田奈琉海
まえだなるみ

太陽の下で向日葵背をのばす

シルバー賞 7 荒尾第四中二年 高田 春陽
たかた はるひ

中二の夏初めての海外旅行

シルバー賞 8 中央小四年 大塚 灯夏
おおつか ひな

母の日の思い思いのプレゼント

シルバー賞 9 平井小五年 上田 早夏
うえだ さな

木の上のせみの生涯みじかすぎ

シルバー賞 10 中央小三年 橋本 のあ

ほたるがりおしりぴかぴか光らせる

シルバー賞の皆さんの俳句、ほかの投句者の俳句も
見たことを、聞いたことを、感じたことを、すなおに自分の
ことばで表現してあり、読んだ人の心にひびきます。
又、来年の投句を待っています。

